

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第103号 令和5年(2023年)3月20日

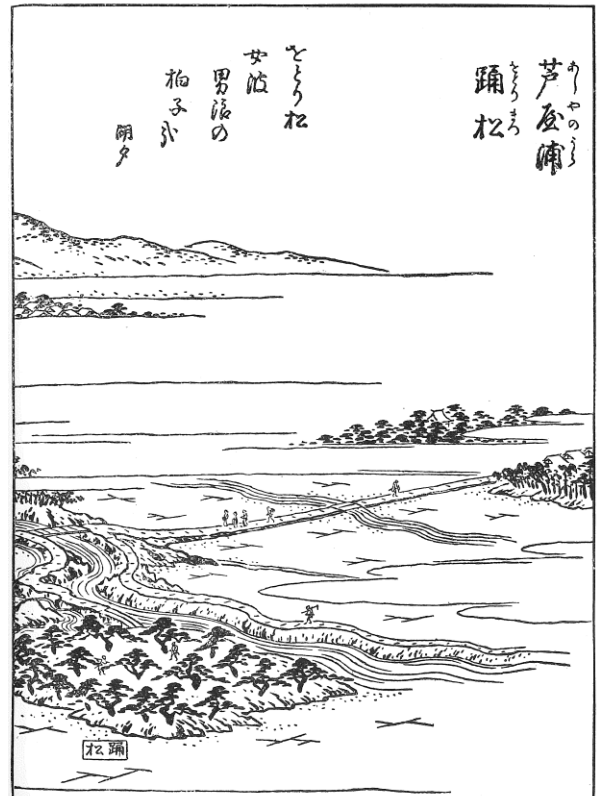
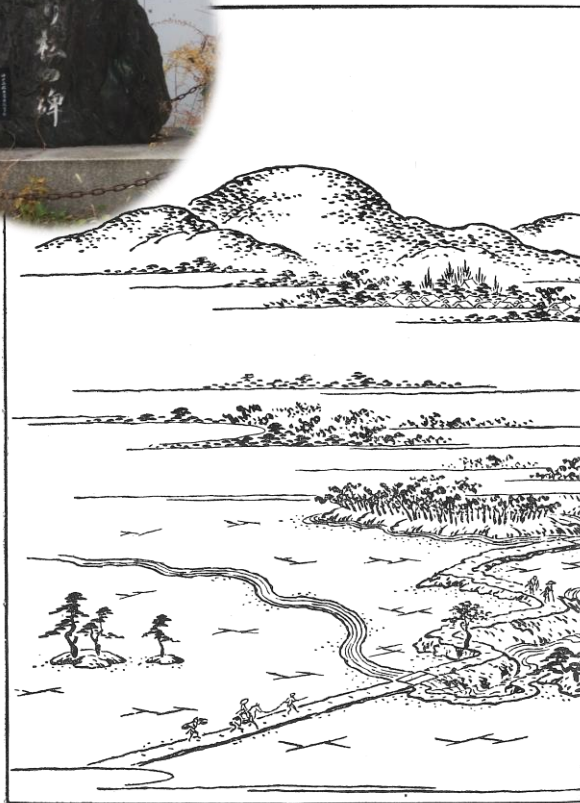
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL: (078)371-3351 FAX: (078)371-5046



踊り松の碑 (東灘区)



『攝津名所圖會』巻七

## 踊り松

阪神電車深江駅から南西に五分ほど歩くと、「踊り松の碑」と書かれた石碑があります。

かつてこのあたりは砂浜でした。江戸時代に刊行された『摂津名所図会』には「芦屋浦 踊り松」が描かれています。言い伝えによると、昔、洪水が起こり、森の稲荷神社の神さまが流され、深江の松の元に流れ着きました。知らせを聞いた森の村人は、麦の収穫期だったので麦搗きの杵を持ったまま松の周囲に集まり、踊りまわって神さまを迎え、神社に帰りました。この時から、毎年卯月卯日の卯の葉祭り(現在は五月初め)に氏子たちが松のまわりで杵を担いで神迎えの踊りをする風習ができ、松を踊り松と呼ぶようになったそうです。森の稲荷神社は深江駅の東の稲荷筋を北へ約一キロの場所にあります。奈良時代初めに深江の浦に流れ着いた神を祀ったと伝えられています。明治時代末まで踊り松は森の稲荷のお旅所として、祭りの日には神輿のお渡りがありましたが、大正時代にお旅所は深江の大日靈女神社の境内に移され、やがて松も姿を消しました。

参考: 『東灘歴史散歩』 『神戸の伝説』 ほか

**Hassojitz 総合商社双日―未来を創造した先駆者たち 第一巻― 双日**  
すずきんかりお画(双日)

明治・大正期の産業革命を第一線で支えた鈴木商店、岩井商店、日本綿花の三社を源流とする総合商社、双日の歴史を漫画でたどる。鈴木商店の金子直吉と岩井商店の岩井勝次郎は、開港間もない神戸の外国人居留地で日本の地位の低さを痛感し、樟脳や砂糖、製鉄など様々な事業を展開していく。五代友厚をはじめ大阪の実業家らは紡績業に着目し、日本人による綿花調達を目指した。行動力や情熱で周囲の人を惹きつけ、日本の近代化を牽引した先駆者たちの姿が描かれる。



**兵庫県小字名集Ⅳ 神戸・阪神間編**  
神戸史学会編(神文書院)

字は市町村の中の小さい区域の名称である。地名にはその土地の歴史が刻まれており、地理や郷土史研究には不可欠である。小字は大字より区域が狭いため、その分生活に根差したものが多し。本書は市町別の大字に小字の表記と読み仮名を列記し、典拠資料と索引を付す。なお、本編で『兵庫県小字名集』は完結する。巻頭には先行する小字研究や、三十年の長きにわたる刊行について、編者ならではの詳細な経緯が記されている。

**播磨の山城** 播磨学研究所編(神戸新聞総合出版センター)

山城は鎌倉時代から戦国時代にかけて、険しい地形を利用し造られた城の一種。本書は利神城や三木城など播磨地方にある九つを現地調査や資料に基づいて紹介しており、山城が歴史の中で重要な役割を果たしていたことが分かる。山城は堀や石垣などの遺構が残っていることが多いが、地元の人には「行っても何もないよ」と言われるそう。ぜひ本書を読んで現地を訪れることをお勧めする。

**小泉八雲―日本の霊性を求めて 別冊太陽日本のこころ三〇〇**(平凡社)

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、松江、熊本に続いて神戸に暮らし、英字新聞「神戸クロニクル」の記者として勤務していた。居留地の西洋人社会に身を置いていたものの心惹かれたのはやはり日本の文化だったようで、本書には能福寺の大仏(兵庫大仏)を見物した逸話が紹介されている。図版が豊富で、自筆の絵や妻の小泉セツに宛てた手紙などもあり、八雲の人物像がよく分かる。

**スパコン富岳の挑戦―GAFANAなき日本の戦い方** 松岡聡(文藝春秋)

ポートアイランドにあるスーパーコンピュータ「富岳」の開発を指揮した著者が、自分史を交えつつ開発秘話を語る。アポロ11号の中継を見た少年時代や、パソコン売り場でプログラミングに励んだ学生時代の経験がスパコン開発にも活かされていることがわかる。終章では、GAFANA(米国の巨大IT企業四社の総称)ほどの資金力を持たない日本における、今後の開発戦略も見据えている。

**ボタニカ** 朝井まかて(祥伝社)

高知県の山中で育った牧野富太郎は、幼少期から植物に触れ、独学で知識を身に付けた。「おまんの、まことの名あを知りたい」と日本人の手で日本の植物相(フロラ)を明らかにすることを志して上京する。研究費を援助したのは神戸の資産家・池長孟だ。池長が牧野の標本を引き取り、植物研究所を兵庫区に作ったことから、神戸にも長年通い、六甲山や布引で植物採集を行った。

借金や学会との軋轢に苦しみなながらも、一途に植物と向き合い、新種の発見、植物図鑑の刊行など多くの功績を残した日本植物学の父・牧野富太郎の人生を描く長編小説。



春いちばんー賀川豊彦の妻ハルのは  
るかな旅路 玉岡かおる (家の光協  
会)

ノーベル平和賞・文学賞候補に  
もなった神戸を代表する社会運動  
家・賀川豊彦の妻ハルの一生を、  
史実だけでなく、小説ならではの  
心理描写を交えて追う。

ハルは横須賀で生まれ育ち、父  
がキリスト教書物の印刷会社に勤  
務していたことから、自然とキリ  
スト教に親しみを持っていた。父  
の転勤で神戸に移り、賀川と知り  
合い、さらに信仰を深めていく。  
賀川と共に社会運動を進めていく  
中、市川房江や平塚らいてう達と  
知り合い、女性の立場にたった活  
動に邁進することになる。



もぐら草子ー古今東西文学雑記 鈴  
木創士 (現代思潮新社)

『神戸新聞』に連載されたコラ  
ムをまとめたもの。ランボー、ア  
ルトーといったフランスの詩人や、  
芥川龍之介、稲垣足穂など、著者  
の愛する作家たちの作品と人生が  
綴られている。

獨創性のある文体や思想をそな  
え、読み手の風景を一変させるほ  
どの衝撃を与えるものを「文学」  
と認め探求してきた著者。そのコ  
ラムは、難解でありながら知識欲  
をかきたてる。子ども時代の遊び  
場だった住吉のヘルマン屋敷、ぶ  
らつき歩いた神戸の街、作家や師  
との出会いなど、記憶をたどって  
語られる文章は郷愁を感じさせる。

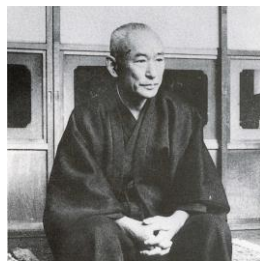
|| その他の新刊 ||

災害に向き合い、人間に寄り添う  
室崎益輝 (神戸新聞総合出版セン  
ター)  
宝塚温泉リゾート都市の建築史 川  
島智生 (関西学院大学出版会)  
降り積もる、言葉が見える 古巻和  
芳企画・編集・デザイン (city  
gallery 2320)

神戸 その26  
あんな人こんな人

五十嵐 播水 いがらし・ばんすい 俳人・医師  
明治32年(1899年) ~ 平成12年(2000年)

五十嵐播水(本名・久雄)は姫路に生まれ、「播水」という号は、少年時代に遊び親しんだ市川(播州の川)に由来しています。姫路中学、三高を経て、京都大学医学部へ進学。播水の俳句の道を開いたのは、人生に大きな影響を与えた高浜虚子との出会いでした。大正9年、医学部一年生のとき、有名な俳人の顔を見ようと京大三高俳句会の虚子歓迎句会に出席し、以来、虚子に師事します。同年、京大三高俳句会の日野草城、鈴鹿野風呂らが創刊した『京鹿子』に参加し仲間とともに句作に没頭していきました。昭和7年『ホトトギス』同人に、昭和9年から俳誌『九年母』の主宰となり70年近くにわたり務めました。句風は温雅静謐と評され、虚子の唱えた花鳥諷詠\*を守り、101歳で長逝する直前まで句作を続けました。



須磨区離宮町の自宅の庭を「雑草苑」と名付け、四季の移ろいを眺めた。石路や銀杯草など静かな草花を好んだという。

同時に医師としては、神戸市立中央市民病院長を務め、退職後は生田区(現中央区)加納町に内科を開業し、94歳まで診療にあたりました。

我が道を貫く播水の生き方がうかがえる文があります。「議論のきれいな私は実行をモットーとした。医者としてはもっぱら臨床に力を注ぎ、俳句は実作を主として今日に至った。これが私のたどって来た人生行路で、私は今、私のたどった道を顧みて別にそれを悔いてはいない。」「わが心の自叙伝」『神戸新聞』昭和41年12月22日より

参考:『虚子門に五十余年』(新樹社,1977)『一老医のあしあと』(永田書房,1986)

肖像:『九年母』876号 五十嵐播水先生追悼号(平成12年8月号)

\*花鳥諷詠ー四季の変化による自然界や人間界の様々な現象を、ただ無心に、客観的にうたいあげること。



句集『石路の花』(創元社,1953)



表六甲・裏六甲ドライブウェイ

表六甲ドライブウェイと裏六甲ドライブウェイは、六甲山上を中心に南北を結んでいます。ドライブウェイの原型が整備されたのは、ロープウェイ（昭和六年）やケーブル（昭和七年）の開通よりも前のことでした。そのあゆみを追ってみましょう。

兵庫県は、大正十四年から三年間の工事で有野御影線を竣工します。この道は有馬郡有野村上唐櫃を起点とし、六甲山上を経て武庫郡御影町に至る道です。古くから住吉越道としてあり、九十九折の羊腸路でした。有野村と阪神地方を結ぶ最短経路であるため、六甲山の開発と相まって自動車道路への拡張が行われ、昭和三年に北側の裏六甲、翌年に南側の表六甲ドライブウェイが開通しました。このうち、表六甲ドライブウェイは奥村千吉の私設のドライブウェイを再整備したものと考えられています。奥村は大阪で鑄鋼所を営んでおり、第一次世界大戦で財を成した人物です。利益の一部で六甲山の

丁字ヶ辻付近の土地を買い込み、昭和二年、開発のために阪急六甲駅から山上までの幅四〇五メートルのドライブウェイを完成させ、そのまま兵庫県へ寄付しました。



『最新六甲山頂記念碑附近明細地図』（昭和6年）部分

両ドライブウェイの完成後には、バスが通るようになります。有馬から前ヶ辻までは有宝バス、阪急六甲から山上までは六甲バスが走り、それまでの登山手段であった駕籠屋は姿を消しました。アクセスが向上しましたが、昭和十三年の阪神大水害により道路は大きな被害を受けます。一部は復旧しましたが、戦争の影響もあり、修復することなく取り残されました。

戦後、昭和二十年代後半になると、観光ブームの兆しが見え、神戸市でも有馬温泉の旅館業者を中心に、官民一体で六甲山及び有馬温泉を瀬戸内海国立公園の一部に編入しようとする動きがありました。六甲山の国立公園への指定が有力となると、観光施設とともに交通網の整備が急が

れましたが、道路建設には財政面の課題が立ちはだかります。戦前の旧道の崩壊具合が激しく、昭和十三年の水害後に造られた砂防堰堤により、旧道とは別のルートに変更する必要があったため、費用が膨らみました。

さらに、市内道路の修繕が優先され、観光道路にまで費用を捻出することは困難でした。検討の結果、有料道路にする方針が決まり、資金調達には、特定の民間会社が金融機関から借りた資金を市に転貸するという方法がとられました。当時、六甲山の開発は阪神電鉄が先行しており、市は阪急電鉄に声をかけました。阪急社内では戦時中の金属供出により姿を消したロープウェイを再建する計画があり、神戸市への融資の是非が問われたようですが、小林一三会長の「これからは自動車の時代だ」という意見で、無事に阪急の協力を得ました。昭和二十九年の市会で有料道路案件が可

決されると、昭和三十年には着工しました。当時は、

工事の調査・測量・設計等は市の職員が



表六甲ドライブウェイ 昭和30年 (PHOTO PORT 神戸市フォトアーカイブより)

直接行っていました。現場研修という名目で新規採用の職員に一か月間測量を担当させたというエピソードも残っています。そのような過程を経て、昭和三十一年八月十日、表六甲有料道路が開通式を迎えました。

表六甲有料道路が開通し、六甲山の観光業が賑わうようになると、有馬を含めた北神地域への道路新設計画が浮上し、昭和三十四年にはルートが検討がされました。第一次計画は先に建設が始まっていた芦有自動車道との兼ね合いにより、実現しませんでした。山上から唐櫃に至る市道有野六甲線を改良する第二次計画が推進されました。昭和三十六年に着工し、翌年には裏六甲有料道路が完成します。

平成十四年六月から表裏両ドライブウェイは無料化され、有料道路ではなくなりました。表六甲では晴れた日には神戸の街が見渡せ、夜には一千万ドルの夜景が広がっています。緑の山並みを通り抜ける裏六甲は森林浴ドライブが楽しむことができ、今なお観光道路としての役割を果たしています。

参考・ 神生秋夫「神戸市有料道路物語（一）（二）」『神戸市史紀要「神戸の歴史」』第3号、第4号、『新修神戸市史 生活文化編』、『有野村誌』、『日本自動車工業史稿二』ほか